

三〇代は 「強く」あらねば

「アラフォー」「アラサー」という言葉が流行りだしたのはいつ頃だったでしょうか。それらが一般的に使われるようになった現在、私は三二歳。まさに「アラサー」世代です。

富山県庁に入庁したのは平成二一年、地元の短大を卒業してすぐでした。結婚したのは平成一七年で、教育委員会に勤務している夫との結婚生活は今年で六年目を迎えます。

県職員女子による 「とやまスイーツ研究会」

平成二三年一月、私は県職員の自主研究活動（サークルのようなもの）という位置づけで「とやまスイーツ研究会」というものを立ち上げました。現在の職場である観光課で、私は県外で開催する物産展の担当をしています。富山県の

特産品といえば、ます寿しなどの海産品のイメージが強く、若い方になかなか来場してもらえないのが課題の一つでした。そこで、昨今流行りのご当地スイーツを富山でも生み出し、物産展の一つの目玉にできないかと考えたのです。

サークルという位置づけにしたのは、スイーツの購買層の中心である二〇〜三〇代の女性の意見を積極的に取り入れたという思いからでした。観光課だけで取り組むのではなく、所属を気にせずリアルな女性の意見を取り入れることで、より魅力あるものができるのでは、と考えたからです。現在研究会に所属しているのは県の女性職員一五名と外部メンバー数名。今のところ全員がいわゆる「アラサー」と呼ばれる世代の女性です。

三〇歳前後の女性というのはそれぞれの仕事や生活が充実し始めて毎日忙しく、



畠 美江

富山県観光・地域振興局観光課特産振興係主任

【はた よしえ】1978年、愛知県生まれ。高岡短期大学（現在は富山大学に統合）卒業後、平成11年に富山県庁入庁。情報政策課、広報課等を経て平成20年より観光課勤務。平成22年に「とやまスイーツ研究会」を立ち上げ、代表を務める。

結婚して家庭を持ち、子育てに奮闘中という人も少なくありません。研究会の活動は基本的に勤務時間外に行っており、土日にイベント出店などを行うこともあります。時間外に打ち合わせを行う場合は夜八時までに終了するのが我々研究会のルール。メンバーには、家庭や仕事に支障をきたさない範囲で力を貸してほしい、とお願いしています。

研究会の活動で心がけているのは、女性らしさを全面に出すことです。せっかく同世代の女性ばかりが集っているのですから、そこをアピールしなければと思います。活動状況をお知らせするブログは女性が喜びそうな華やかなデザインを選び、絵文字も積極的に使っています。打ち合わせなどの資料はあえて丸みのあるフォントを使い、イベント出店の会場装飾は、ピンクやクリーム色をメインに柔らかく

「とやまスイーツ」の定義

- ①富山県内で製造および販売されているお菓子であること
- ②県産素材を使用したお菓子であること
 - ・富山県産の卵や牛乳、野菜、果物、米粉などを使用している
- ③外観・名前・パッケージのいずれか又は複数で、富山県をイメージさせるものがあること
 - 例)・雪の大谷や高岡大仏など、富山の観光名所をイメージさせる形である
 - ・観光地や地元の地名を商品名に使用している
 - ・パッケージに富山県の観光シンボルマークとキャッチフレーズを使用している
 - ・パッケージに県内観光地のイラストを使用している
 - ・富山の海や山をイメージさせる形、名前である など
- ④体にやさしい工夫のあるお菓子であること
 - 例)・合成保存料や着色料を使用していない
 - ・おからなどを使用し、低カロリーに仕上げている
 - ・アレルギーのある人でも食べられる
 - ・ハトムギ使用で美肌への効果が期待できる など

女性らしい
視点

「くすりの富山」の
イメージ



研究会の会議はわきあいあいとした和やかな雰囲気

「とやまスイーツ」の定義について お披露目

研究会では、二週間に一度のペースで集まる機会を設け「とやまスイーツ」として地元のお菓子を県外にPRしていくための戦略等について意見交換を行っています。初年度の目標は「とやまスイー

可愛らしい印象になるようにすることで、メンバーも楽しんで活動に参加できるようにしているつもりです。



とやまスイーツの試作品



試作お披露目会では周囲から想像以上の反響が！

ツとはどのようなものをいうのか」というところを明確にすることでした。県内の洋菓子店の情報収集を行い、気になった商品をピックアップした試食会を開催して議論を重ね、「とやまスイーツの定義」として四つの条件をまとめました(表)。

定義がまとまった後は、どこかでそれを発表できる場を設けたいと考えました。ご当地スイーツとして売り出すためには、まずは県内のみなさまにきちんと認知してもらわないと始まらない。そのため

は積極的にマスコミに情報提供し、地元の新聞やテレビに取り上げていただくことが必要だと考えたからです。

研究会を立ち上げた当初から「県の女性職員達が何か面白そうなことをやっている」と地元の新聞等に取り上げてもらうことができました。そこで、今回もマスコミ向けに発表できる場を用意することにし、ただペーパーを配布してもつまらないということで、定義づけに基づいて私達研究会メンバーが考えた「とやまスイーツ」を試作品という形で県内の洋菓子店に作ってもらい、それを定義とともにお披露目することで、私達がイメージしている「とやまスイーツ」とはどんなものであるのかを具体的に示したいと思いました。

そして、平成二二年五月末に定義づけの発表と試作品のお披露目の場として、研究会メンバーによる試食会を開催しました。試食会の開催についてはもちろんマスコミへのプレスリリースを出しましたところ、予想以上に取材が殺到してちょっとしたパニックになりました。

当初の予定では、試作したスイーツを研究会のみんなまで食べながら今回まとめた定義についての説明を行い、今後の取り組みについて打ち合わせを行うつもりでしたが、進行役を務めるはずだった私は、開始前からマスコミ対応に追

われて進行どころではなく、一時間ほど経過したところでようやく取材の波も落ち着き、なんとか本来やりたかったことができたような感じでした。

この試作お披露目の日は、全てが終わって帰宅し、自宅のリビングで腰を下ろした直後、しばらく立ち上がれなくなるくらい疲れ果てていたのを今でもよく覚えています。とりあえず第一ステージをクリアした、そう感じた瞬間でした。

商品募集の蓋を開けてみると…

試作品と定義づけのお披露目が終わった後は、六月一日から三〇日までの一カ月間、定義づけに基づく商品の募集を行いました。定義づけを満たしたお菓子を全て「とやまスイーツ」として、そのまま県内の様々なお店から売り出してもらうということも考えましたが、私達研究会の目的は最終的に県外に持っていける商品を発掘または生み出すことだったので、応募された商品の中から一〇点を「とやまスイーツ研究会認定商品」として選定し、それらを売り出していくことを活動次年度の目標としました。五月にマスコミへの発表の場を設けたのも、マスコミを通じてこの商品募集についての告知を行うことで、なるべく多くのお店に私達の取り組みを知ってもらい、応募してもらえるようにする狙いがあったからでした。募集をかけてみても、実際のどのくらい

反応があるものだろうかと心配していましたが、六月末に募集を締め切ったところ、予想を上回る五〇点近くの応募がありました。

研究会が審査をして「とやまスイーツ」として認定します、といっても県の事業ではなく自主サークルがやることです。で、助成金が出るわけでもなければ全面的に県の支援が受けられるわけでもありません。私達ができることは研究会としてそれぞれの商品を紹介し、イベント出店などを通じて行うPRのみ。応募されるお店の方がどれだけメリットを感じてくださるか、その点が非常に不安でした。正直、私個人としては二〇点ほど応募があれば十分かなと思っていましたので、これだけの反応があったことには大いに驚きましたが、個人や家族で経営している小さなお店が多い県内の洋菓子業界では、広告経費をかけずにお店の宣伝ができるというのは魅力に感じられたようです。

それから大変だったのが商品の選定です。認定商品の審査では、まず書面による一次審査で定義づけを満たす度合や外観等をチェックし、応募があった五〇点近くの商品を二〇点に絞り込みました。次に二次審査として商品現品を取り寄せ、実物をチェックしながら実際に試食も行い、地域バランス（店舗所在地）や品目バランス（ロールケーキ、プリンな

どの分類）に偏りが出ないよう考慮しながら一〇点の認定商品を決定しました。これで第二ステージクリアです。

つよつよ県民にユウ

認定商品が決定した後は、県民の方にお披露目する場が必要だと考えました。ちょうどその頃、県内で開催されるイベントへ出店するお誘いをいただいていたので、イベント会場で認定商品を販売してみようということになりました。しかし、私達研究会の活動はサークルという位置づけから予算らしい予算はなく、また、メンバーは公務員である県の職員が中心なわけですから、儲けを出すわけにはいきません。

富山県では、職員が行う自主研究活動に対し、職員研修所が必要な事務用品を購入するなどの支援がありましたので、今回はそれを活用して販売に必要な包装材や保冷剤等を購入してもらいました。

販売については、商品を各お店から買い取り、一〇点の認定商品を四種類ずつ箱に詰め合わせにしたものを五〇箱限定という形で、買い取った価格そのままを出しました。買い取りはもちろん私達の自腹。二日間のみのイベントでしたので、途中で商品を追加することもできず、もし売れ残れば研究会メンバーで手分けして在庫を引き取るということになるという状況。

タウン誌に
取り上げていただきました



地元マスコミの取材



数量限定で出すのが妥当だろうということ
とでこの形になりましたが、限定として
出したのが良かったのか、来場者の反応
は上々。初日は開店から半日で、翌日は
開店から二時間足らずで完売となりまし
た。

認定商品の審査やイベント出店などの
活動を行っていた頃、地元のフリーペー
パーやタウン誌が県内のスイーツ特集を
組み始め、私達の活動も何度か取り上げ
ていただきました。「とやまスイーツ」に
ご協力いただいている洋菓子店の方々に
恩返しするため、取材申込みは基本的
に来るものは拒まず、お話をいただいたも

のはできる限り引き受けるようにしてき
た結果、徐々に県内での認知度も高まり
その後のイベント出店でもかなり反響が
ありました。ここで第三ステージはクリ
アかなと思います。

現在は、いよいよ県外で開催する物産
展に出品するため品目や販売数量につ
いての検討を進めています。県内の反応は
まずまずとはいっても、東京や名古屋で
は全く知名度がないわけで、県外の方
どのように受け止めてもらえるかは出
みないと分かりません。どの商品を持
ていくか、どんな風に売り出すか、目下
頭を悩ませているところです。果たして
第四ステージも無事クリアできるでしょ
うか。

共働きは持ちつ持たれつ

さて、研究会の話はここまでにして、
ここからは私の普段の生活について少し
書きたいと思います。

「スイーツ研究会」の活動や本来の物
産展の業務で精力的に働く時期になると、
当然しわ寄せが来るのが日頃の家事です。
我々夫婦は市内のアパートに二人住まい
で、ゴミ出しや洗物など夫もできる範
囲で手伝ってはくれるものの、食事の支
度や掃除・洗濯などは当然妻である私の
仕事。平日はなかなか手が回らないので
掃除や洗濯は週末にまとめてするのが基
本です。

ただ、食事の支度はそういうわけには
いかないため、前もって帰りが遅くなる
ことが分かっているときは前の日にま
めて食事の支度をしたり、土日の間にお
弁当のおかずを作り置きしたりしてし
ています。が、突発事態で帰宅が遅く
なってしまうときは、外食に頼ること
もあります。以前は少々罪悪感がありま
したが、今は共働きであれば仕方がない
こと、と割り切っています。

今の職場では物産展や観光キャンペ
ンなどで出張する機会が多く、場合によ
っては一週間近く家を空けることもあり
ます。そんなときは近くに住む実家の母
の出番。掃除や洗濯は出張から帰ってか
ら私がするにしても、食事の支度は作り
置きや外食にも限界があるので、私が不
在の間は実家の母に頼んで夫の食事を差
し入れてもらっています。頼れる存在が
近くにいないというのは非常に有難いこ
とです。

出張で頻繁に出かけていると、「そんな
に家を空けてご主人は何も言わないの？」
と周りの方に聞かれます。しかし我が家
の場合はノープロブレム。前述のとおり
不在にしている間の家事については実家
の母に甘えられますし、仕事で家を空け
ることについては夫もよく理解してくれ
ているからです。

結婚した当初、私達夫婦は一年ほど別
居生活を送っていました。当時の夫の勤



務先は標高一九四〇メートルの弥陀ヶ原にある日本最高所の国民宿舎。春から秋にかけてのシーズン中は住み込みで働いていたため、自宅に帰ってくるのは月に二〜三度がせいぜいでした。夫曰く、あのときは自分が留守続きで申し訳なく思っていたので仕事で互いに留守がちになるのは仕方ないと考えているとのこと。イベント出張は楽しんでやっているようだし遠慮せず行つて来いと言われ、毎回快く送り出してもらっています。私の今の生活は、穏やかで寛大な夫の理解と実家の母の強力なサポートがなければ成り立ちません。

休むときはしっかりと休み、働くときはガッツリ働く

ここまで書くと、私は完全に仕事中心の生活を送っているような印象を受けるかもしれませんが、決してそうではありません。物産展の開催時期以外は比較的业务が落ち着いているので、イベント等のない普段の土日のお休みは基本的に自分と家庭のための時間になっています。

土日二日間のお休みがあるときは、二日のうち一日は平日でできなかった家事をまとめてやる時間にあて、残り一日は夫や友人と外出するか、家でのおんびりするのが定番。夫は友人と草野球チームを組んでおり、土日のどちらかは一日練習に出かけます。彼にとってはそれが大事な

自分時間ですので、私は夫が出かけている間にたまった家事を片付け、残り一日を二人で一緒に過ごせるようにしています。

また、連休などまとまったお休みがあるときは、趣味であるお菓子作りに没頭したり、ゆつくり本を読んだりして過ごすことでパワーチャージしています。

先日は、年次休暇を取って同期の友人と和倉温泉に行つてきました。温泉に浸かつて美味しいものを食べ、アロマエッセテを受けて贅沢に過ごし、翌日は世界的に活躍するパティシエ辻口博啓氏のカフェで美味しいケーキとお茶を楽しみ、その後は気多大社まで足を伸ばすという完全女子旅を満喫。たまには女同士でわいわいと騒ぐのも楽しいものです。

休むときはしっかりと休み、働くときはガッツリ働くのが私のモットー。何かと忙しい三〇代をパワフルに乗り切るには、メリハリをつけて過ごすのが一番だと思います。時にはちよつと息抜きし、ちよつとした贅沢で自分にご褒美を与えることも大事。無理をするのは精神的にも肉体的にもよくありません。そして、夫とは常にべつたりではなく、個人として互いの仕事や自分の時間を尊重しあえる関係が理想だと考えています。

二十代は 美しく
三十代は 強く

四十代は 賢く
五十代は 豊かに
六十代は 健康に
七十代は しなやかに
八十代は つややかに
九十代は 愛らしく
そして いぶし銀のように
美しい百歳へ

(女の一生／絵馬師 殿村進)

これは私が人生のお手本にしている大好きな言葉です。現在私は「強く」に入つたばかりです。これからもタフであらねば。

ちなみに、これに対応する形で「男の一生」というのもあります。

二十代は 志を高く
三十代は 仕事に燃え
四十代は 功を焦らず
五十代は 寛容をくいて
六十代は 引き際よく
七十代は 時を遊び
八十代は 自由を楽しむ
そしてそれからはいぶし銀のように
幽玄の境で

仕事に燃える男性の三〇代、夫が体を壊さないよう、精一杯サポートするのが妻としての役割でしょうか。今後できる範囲で努力したいと思っています。